The Merchant of Venice 研究試論（1）

石　原　孝　哉

— 序 —

"Indian Empire, or no Indian Empire; we can not do without Shakespeare."(1) という Carlyle の絶叫に代表される Romantic Criticism も，名著 ***Shakespearean Tragedy***(2) によってその頂点に達すると，今世紀の批評は，おおまかにいって Bradley 的な方法とは逆の方向に進んでいった。ブラッドレーの書物を読んでいると，シェイクスピアの作品が 'Elizabethan drama' の発展過程の中で成長していったというような一面はほとんど忘れられてしまう。ロマン主義批評論が近代的な哲学，心理学によりシェイクスピアの 'imagination' の過程を内部から解釈する性格批評であったのに対して，二十世紀の批評の主潮はシェイクスピアを再び彼の時代に還元しようとする方向に向っている。かくて当時の舞台事情や，出版事情，社会環境，政治，経済，風俗，習慣等を知ることにより，シェイクスピアを歴史的，客観的に理解しようとする E. E. Stoll や Levin. L. Schücking 等が，批評や研究の新生面を開くと共に学界の主流となってきた。しかし，この写実主義批評論にも宿命的な欠点があった。それはシェイクスピア自身の 'genius' をしばしば見落して，シェイクスピアを単に中世的遺産，エリザベス朝的な 'connection' の固まりとしてしまうことである。そしてこの弱点をついて，新しい可能性を切り開こうとした審美的批評論も多数の満足を得るには至っていない。そこで当然考えられるのは，それぞれの批評の長所を生かすことである。この方法も単に諸批評の混合では意味がない。ここでは前記の写実主義批評論(3) とロマン主義批評論の長所を生かして ***The Merchant of Venice*** をもう一度見直したいと思う。数あるシェイクスピアの作品の中で ***The Merchant of Venice*** ほど，その解釈において対照的なものは他に例を見ない。殊に Shylock の性格は喜劇的なのか，悲劇的なのか，諸家の間でずいぶん長い間論議されてきた問題であるが今なお決して解決がついたとはいえない。時代的背景，戯曲的構成，喜劇の伝統と上演史等を考慮しつつ，私なりにこの問題にも結論を出して見たい。

(一) *The Merchant of Venice* の時代的背景について

— I —

四大悲劇の中で劇的な技巧が最も完璧であるといわれている *Othello* と同様この劇も Venice を舞台として書かれている。ヴェニスといえば我々の頭にすぐ浮ぶのは，水の都，ゴンドラと古典的な魅力を持った恋の町，といったイメージであろう。二十世紀の我々の感覚からすれば確かにヴェニスは，かつて Wordsworth[4] や Byron[5] が歌いあげている様に，ロマンティックな過ぎし日の栄光を偲ばせる町である。ところがシェイクスピアの描いたヴェニスは *Othello* においても *The Merchant of Venice* においても，このようなロマンティックな町ではない。

北部イタリー諸都市の多くは地中海に望み東方貿易の絶好の地の利を占めていた。こうした中で，商工業が発展し，都市商人の経済力が大きくなるにつれて，都市住民は領主に対して都市の自治を要求し，裁判権や課税権を得ようとして領主と対立し，戦いを起こしていった。その中でもヴェニスは最も早く独立して，自由市となったが，十一世紀から十二世紀にかけては，Genova, Pisa, Bologna 等が次々と独立していった。これらの自由市は，地方によって多少の違いはあるが，多く領土と独自の軍隊，独自の参事会，独自の裁判所とを持ち，法律を作って裁判を行い，独自の貨幣制度を作った。このような状態であるから独立自治の精神が強く，法律は厳正であった。法廷の場面で我々は，このヴェニス共和国の自治，裁判の様子を知ることができる。すなわち Shylock はこの厳しい法を逆手にとって Antonio の肉を執拗に要求する。

I have posses'd your grace of what I purpose ;
And by our holy Sabbath have I sworn
To have the due and forfeit of my bond :
If you deny it, let the danger light
Upon your charter and your city's freedom. (IV. i. 34—9)

If you deny me, fie upon your law !
There is no force in the decrees of Venice.
I stand for judgement : answer, shall I have it ? (IV. i. 101—3)

元来，ヴェニスの支配階級は，封建貴族と大商人（遠隔地商人）とが合体したものであり，仲介貿易によって巨大な経済力と政治力を持っていた。他のヨ

ーロッパ諸国と違って，支配者が複数であったため互の権力を牽制しあうために，法の運用は殊に厳正であった。だから Bassanio が，権力に訴えても法を曲げてくれと頼むのに対して Portia はきびしくはねつける。

It must not be ; there is no power in Venice
Can alter a decree established :
'Twill be recorded for a precedent,
And many an error by the same example
Will rush into the state : it cannot be. (IV. i. 218—22)

そして十字軍の遠征が始まると，ヴェニスの遠隔地商人は十字軍のために船舶を建造，貸与し，東方輸送に従事し，その力を借りて，パレスチナ，小アジア，エーゲ海諸島の諸港を占領して，東方貿易の拠点を作り，帰り船には東洋の物産の香料，宝石，象牙，絹織物等を積んで西欧に向い，巨大な利益を獲得した。この間のヴェニスのやり方は，まさに生馬の目を抜くものであった[6]。第四回十字軍の時など，ヴェニスは東ローマ帝国内の貿易権を握ろうとして，十字軍を Constantinople に向けさせ莫大な利益を得た。そしてここにラテン帝国を建設し，ヴェニスはその商権を独占し，一方十字軍の将士は莫大な略奪物に満足して，聖地回復という本来の目的を放棄した。

この様にヴェニスは商人の町であり，実利の町であった。シャイロックの最初の登場を見ると，この様子が非常にリアルに表現されている。

Shy. Three thousand ducats ; well.
Bass. Ay, sir, for three months.
Shy. For three months ; well.
Bass. For the which, as I told you, Antonio shall be bound.
Shy. Antonio shall become bound ; well.
Bass. May you stead me ? Will you pleasure me ? Shall I know your answer ?
Shy. Three thousand ducats, for three months, and Antonio bound.
Bass. Your answer to that.
Shy. Antonio is a good man.
Bass. Have you heard any imputation to the contrary ?
Shy. Oh, no, no, no, no : my meaning in saying he is a good man is to have you understand me that he is sufficient. (I. iii. 1—17)

一見単純なやりとりであるが，これだけで，シャイロックの性格，いやヴェニスの商人の実態が如実に表われている。バサーニオーの言葉を反芻しながら，シャイロックの胸に去来していたものは何か？ もちろん，周到な金利の計算であろう。そしてシャイロックにとって‘a good man’というのは‘sufficient’の意味で金があって，支払能力のある人間という意味にすぎない。同じヴェニスで，商業に従事する者でありながら，“In sooth, I know not why I am so sad:”という台詞で登場するアントーニオとは何という相違であろうか。

十字軍戦争によって巨万の富を得たイタリー諸都市は益々発展し，殊にヴェニスは 1500 年頃には，商船 3000 余隻を保有し絶頂期であった。その後，ジェノアとの海上権争いや，トルコとの海外領土の争奪戦などで国力は，やや下り坂となったが，シェイクスピアの時代にはスペインと組んでトルコを破り[7]，依然として地中海の覇者であった。最初の場面で Salarino がアントーニオを慰める台詞を見てみよう。

Your mind is tossing on the ocean;
There, where your argosies with portly sail,
Like signiors and rich burghers on the flood,
Or, as it were, the pageants of the sea,
Do overpeer the petty traffickers,
That curtsy to them, do them reverence,
As they fly by them with their woven wings. (I. i. 8—15)

これは単に，大商人アントーニオの実力ばかりではなく，当時のヴェニスの実情を適切に表現しているといえる。また，次のシャイロックの台詞からも，当時のヴェニスの商人の海外貿易の範囲を想像できる。

……he hath an argosy bound to Tripolis, another to the Indies; I understand moreover, upon the Rialto, he hath a third at Mexico, a fourth for England,…… (I. iii. 18—21)

この台詞が示すものは，世界を股にかけてのアントーニオの活躍であると共に，当時のヴェニスがいかに広範囲の国際貿易に従事していたか，またその背景にある富裕で強大なヴェニス共和国の様子を如実に示すものである。このようにヴェニスは，愛とロマンスの町ではなくて，商業を中心とする実利的，現実的な町であった。

— II —

この劇の舞台はイタリーであり，登場人物もまた，イタリー人であるが，そこに描かれているのはどこまでも作者や観客に親しみ深い現実のイギリス人の生活であり，心理である。十六世紀のイギリスは新時代の光が差込んできはじめたとはいえ，他の西欧諸国と比べると，まだ中世的なものの考え方が支配的であった。例えば民間における迷信であるが，幽霊や魔女[8]は現存するものと考えられ，現に James I は悪魔や魔女を信じていたし[9]，聡明なエリザベス女王でさえ，魔法師や占星家を招いて，彼等の意見を求めたといわれる[10]。

従来，中世は暗黒時代であり，その暗黒時代からの解放が Renaissance であると考える傾向が著しかった。しかし最近のアメリカの学界を中心とする研究者達は，その豊富な人材と資力を動員して，次第にこのルネィッサンスの実体を明らかにしてきた。そしてこの時代が近世の輝かしい門出というよりはむしろ，巨大な中世の神話が次第にうすれ始めてきた一つの過渡期であることを実証している。エリザベス朝の人々が一般に信じていたことの一つに‘the elements’（原素）がある。つまり，あらゆる物質の性質は基本的四つの原素，‘earth, water, air, fire.’の四大に因るという考えである。原素はおのおの二組の性質を持ち，定められた秩序[11]を持って並んでいると考えられていた。すなわち最も重くて，低いものは，冷たくて，乾いた元素である土である。土の外側には冷たくて，湿った水があり，その外側は暑く，湿った領域としての空気があると考えていた。空気は水よりも高貴であるが，純粋さにおいてはエーテル[12]に比較することはできない。天使がエーテルから自分の形を作り出すように，悪魔や魔女は空気からわが身を作る。最も高貴なものは火で，熱くて乾いた性質を持っている[13]。

これらの元素は互に違った性質を持っていて，対立，抗争するが，神はその破滅を防ぐため，これを巧みに配置した。例えば，土は冷たく乾性であり，熱くて，湿った空気とは対立するが，神はこの間に両方の性質を持っている水を仲介物としておき，火と水とは対立関係にあるが，神はこの間に空気という仲介物をおいて，平和を保っている。

しかも，この考えは万物にあてはまる。例えば馬を例にとると，——当時は馬術はナポリ人の特技と考えられ，ロンドンにも多くのナポリ人調教師がいたと言われる。ポーシアがナポリの王子を評して：——Ay, that's a colt indeed, for he doth nothing but talk of his horse ; and he makes it a great appropri-

ation to his own good parts, that he can shoe him himself.[14]——というのは，これを皮肉ったものである。このナポリ人達は馬に関してはあるゆる知識を持っていたが，その根本原理は元素であった。例えば，土質の馬は，気が重く，ふさいだ気弱な性質で，その色は，黒か，あずき色，あるいは焦茶色である。水質の馬は，無気力で，のろまで，鈍感で肉にされてしまう傾向があり，その色は乳白色であるという具合である[15]。

この考えは当然人間にも当はまる。人間にあっては，原素は体液病理説[16]となる。すなわち，食物は胃から吸収されて，肝臓にいき，基本的な四体液を生みだす。つまり‘melancholy’（黒胆汁），‘phegm’（粘液），‘blood’（血液），‘choler’（胆汁）である。そしてこの性質は原素の地水火風の四大と全く同一であり，健康体では，おのおの二つの基本的特性を持った四体液が平均に混合している。そこで，Antony が死んだ Brutus を評して：——…, and the elements so mix'd in him that Nature might stand up and say to all the world ‘This was a man’,[17]—— といっているのはブルータスが全く均衡のとれた人間であったことを示している。

しかし，大抵の場合，これらが平均して交わり合っているのではなくて，一つが優性を占めて，それが個人の性格や気質を決定している場合が多い。そしてこの体液によって生ずる‘humour’（気質）と‘the four elements’(四大)，また惑星との間には，それらをつなぐ関係があると信じられていた。例えば，胆汁質の人に対応する元素は火であり，その星は火星である。体液が冷たく乾性の黒胆汁質の人は土星[18]の支配下にあり，それに対応する元素は土である。

これを劇として登場させたのが性格が一目でわかる‘comedy of humours’（気質喜劇）である。例えば，黒胆汁気質の人は，痩せ干からびて，鉤形に曲つた爪を持ち，顔面は蒼白，または黄味を帯びていた。その特性についていえば，がみがみ屋で，愚痴っぽく，頑固で貪欲で，歩く時は，頭を垂れ，顔をしかめ，残忍な顔つきで，ゆつくりと足を運ぶ，といった具合である。そして，原話におけるシャイロックは正にこの型に属していた[19]。

話を体液に戻すと，Hippokrates は全ての病気の根源を，体液の異常と不消化な食物から排出された悪い空気によるものであると考える。Sir Toly Belch[20] や Falstaff[21] が臆病者の肝臓には血がないといったり，あるいは，それをブドー酒で暖めるのを Gratiano が：——With mirth and laugher let old wrinkles come, and let my liver rather heat with wine than my heart cool with mortifying groans.[22]—— というのは，いずれも，ヒポクラテスの説に基く当

時の一般的な考え方の証左である。

地水火風の四大が惑星と対応していることはすでに述べたが，当時の人々は，惑星だけでなく全ての星の運動を Ptolemy の天文学によって説明していた[23]。彼によれば，宇宙は同心体をなす九つのうつろな透明の球体，すなわち，'Primum mobile'（最上天），'the fixed stars'（恒星群），Saturn, Jupiter, Mars, Sun, Venus, Mercury, Moon がそれぞれの天体を持ち，その天体はおのおのの天使，Seraph（熾天使），Cherub（智天使），Throne（座天使），Domination（主天使），Virtue（能天使），Power（力天使），Principality（権天使），Archangel（大天使），Angel（天使）の支配下にあると考えられていた[24]。そしてこの天使の階位は地上の聖職者の階位に対応するものとされ[25]，この天体を前記の天使達が地球を中心として回転させる時，天体と天体とが触れ合って生ずる音が，'music of the spheres'（天体の音楽）である。有名な Lorenzo の台詞もこの音楽にふれている。

There's not the smallest ord which thou behold'st
But in his motion like an angel sings,
Still quiring to the young-eyed cherubins;[26] (V. i. 60—3)

そして，この音楽は Plato によると我々には肉のけがれのために聞きとれないと説明されている[27]。

Such harmony is in immortal souls;
But, whilst this muddy vesture of decay
Doth grossly close it in, we cannot hear it. (V. i. 63—5)

上記のロレンゾーの台詞は明らかにプラトーンの考え方を反映している。この考えはキリスト教でも支持されたため，エリザベス朝ではごく一般的になっていた。

このように，エリザベス朝のイギリスは我々が考えるよりも，ずっと中世的であったといえる。従って，Tillyard ではないが，このような考えを奇妙だと思っている限り我々は本当の意味のシェイクスピアを理解することはできない。

— III —

The Merchant of Venice の一つの焦点となっている金利の問題に目を向けてみよう。中世には，教会が聖書で金利を禁じていた[28]ので，利息を取ることを罪悪視していた。金利罪悪観の倫理的根拠は Aristotle に負うところが多い。彼の主たる理由は，果物や家畜から金を得ることは自然であるが，無生物の金

にあたかも繁殖能力があるかのごとく，金に金を生ませる金利は不自然であり，最も憎むべき行為である[29]というのである。こうした金利罪悪観はシェイクスピアの時代にも継承されている。シャイロックが聖書の Jacob[30] の例を引用して利息を正当化しようとするのに対してのアントーニオの反論をみよう。

This was a venture, sir, that Jacob served for ;
A thing not in his power to bring to pass,
But sway'd and fashion'd by the hand of heaven.
Was this inserted to make interest good ?
Or is your gold and silver ewes and rams ? (I. iii. 92—6)

…, for when did friendship take
A breed for barren metal of his friend ? (I. iii. 134—5)

ここで，アントーニオの理由は，いずれも，金は子を産まぬからというアリストテレスの理論が根拠となっている。

エリザベス朝は中世的な経済機構から近世資本主義への転換期であった。イギリスでは十五世紀末には，農奴制は事実上崩壊し，その中から富農層が生れていった。封建領主制が崩れ，Henry VIII が修道院を解散すると土地所有権に大きな変動が起った。その広大な土地を買入れたのは都市ブルジョアジーの一部と富裕農民，中小貴族の一部であった。彼等はやがて，新興土地所有者となって，'enclosure'（囲い込み）によって益々力をつけていった。このように農村で新興地主層が新しく台頭しつつあったのに対し，都市では，商業資本家が'mercantilism'（重商主義）の旗印の下に急速に発展し，商品の流通を次第に独占し，一方では，王権と結んで特権階級の商人として勢力を拡大した。

このような商業を中心とする資本の活発な流動は，もはや金利を罪悪とみなす夢に安んじていることを許さなかった。スイスでは，これをいち早く察知した John Calvin が金利の合理性を認めていた。イギリスでもついに 1571 年になって，聖職者やこれを支持する議員の猛反対に合って，ながながと延引されたあげく，議会はとうとう最高，年一割にかぎり，正式に金利を認めた。そして，これは益々都市商業資本の力を助長することになった。

この時代は産業革命によって機械制大工業が出現する以前の段階で，'putting out system'（問屋制手工業）の時代に当る。当時のイギリスは，どこの町に行っても織物工場の糸車の音が聞かれ，都市商業資本は次第に都市周辺の，織物工業を中心とする生産者の間に浸透していった。彼等都市商業資本家のやり口は実に巧妙で，まず，生産者の原料購入や，製品の売買を独占する。次に，独

占権を大いに利用して，製品を買いたたく。最後に，原料購入のための資金を高利で前貸することによって，生産者を金利でがんじがらめにして，彼等に隷属さててしまう。これがいわゆる問屋制家内工業である。

一方，新大陸の発見後，殊にスペイン領からは原住民の奴隷労働によって安価な銀が大量にヨーロッパに供給されるに至り，貨幣価値の下落と物価の騰貴が起った。この物価上昇は賃銀労働者の生活を圧迫し，一定の地代を唯一の収入源としていた中小貴族や封建領主層の没落を決定的にした(31)。

また，囲い込みによって土地を追われた農民達の多くは織物工場や炭鉱等で低賃金で働かざるを得なかった。そして物価の急昇と社会の急激な変化で金の必要にせまられた彼等は必然的に高利貸の絶好の餌食となった。年一割の制限は表向きだけで，実際には年三割から四割の利率で，極端なのは抵当付で年十割というのさえあった。

これらの情勢に対処するため，エリザベス女王は徒弟法を発布して，職人の賃銀や労働条件，労働時間を規定したが，彼等がなによりも切望したのは，無謀な金利の抑制であった(32)。ある意味で，エリザベス朝から十七世紀にかけては高利貸の黄金時代であった。というのは，一方では中世的経済機構が崩れ，他方では完備した近代の銀行制度がまだ出き上っていなかったからである。

しかし，商業高利貸資本の隆盛は，十六世紀後半になると少し様子が変ってくる。この頃になると農村の富裕な農民の中から‘manufacture’(製造業）を営む者が現われた。さらにまた都市の問屋制度，商業資本の支配下にあった‘small masters’(小親方）の中の裕福な者は，問屋制前貸の支配や‘guild’(職人組合）の束縛を離れて，自由な農村に移り，製造業を営むようになった。その結果，彼等は政治権力と結びついた都市商業資本と次第に対立するに至った(33)。

こうしたなかで，金利に対する反発は，商業資本への反発と結びついて，今日我々が想像する以上に激しいものであった。それは，前記の中世的なものの考え方と相俟って，一つの社会問題となっていた。シェイクスピアが *The Merchant of Venice* の題材に，このような社会的関心事をとりあげたのは，彼のような職業作家としては当然のことといえる。

— Ⅳ —

筆者は *The Merchant of Venice* の主人公がユダヤ人であるという事実から目をそらすわけにはいかない。

英国史上に，ユダヤ人が正式に登場するのは William the Conqueror（征服

王）の時代以後である。彼等ユダヤ人達は Normandy から征服王の軍隊に従ってイギリスに渡ってきた。キリスト教社会では一般の職業につくことを拒否された[34]彼等は金貸業という口を見つけた。十二世紀になると，ノルマンの貴族達は出征のため，まとまった金額を必要としたので，ユダヤ人に頼らざるを得なかった。すると彼等は莫大な金利を要求した。彼等はキリスト教の敵として，また職業的債権者として，白眼視され‘ghetto’（ユダヤ人地区）に差別的に隔離され，自然，彼等にとっては，いわれなき民衆の憤激から生ずるあらゆる運動の犠牲者となった。

彼等の唯一の保護者は国王であった。農奴が領主に属するように，彼等の生命財産のすべては国王のものであった。国王の都 Winchester はユダヤ人が公民権をもつ唯一の都市であり，彼等はここをイギリスの Jerusalem と呼んだ。ユダヤ人の債権証書は，ウインチェスター宮殿の特別の一室に保管され，国王の債権と同様に，特典を賦与されていた。彼等がいかに重要視されていたかは，そのうちの一人である Lincolnshire の Aaronis が死んだ時，彼に関する事務清算のため，出納法院の中に特別の一課‘Scaccarium of Aaronis’が新設された事実をみてもわかる。このような保護を与える代償に国王は彼等に多額の金を要求した。通常の年度で，3000 ポンド，すなわち Henry II の全収入の実に七分の一はユダヤ人に負うていた。

このような有力な財源であったユダヤ人も，突然の反ユダヤ暴動や，組織的な宗教的迫害には多大の犠牲を強いられた。ヨーロッパ大陸においてもユダヤ人の犠牲は珍しいことではなかったが，特に反異教徒熱が盛り上った十字軍の遠征に際しては，暴徒化した戦士らによって，神の名において多くのユダヤ人が虐殺の憂き目をみることとなった。ドナウ，ライン，セーヌ川沿岸各地では，特にそれがひどかった。しかも，十字軍の失敗の結果，おびただしいユダヤ人に関する悪意に満ちた神話がヨーロッパに広まった。イギリスにおいても，ユダヤ人の理由なき——白人達には相手がユダヤ人であるというだけで充分なのであるが—— 虐殺は決して珍しくない。1189 年，Richard Coeur-de-Lion の戴冠式の際の大虐殺は有名な例である。殺人者は見つけ次第絞首刑に処するとの国王の布告も何の効果も示さなかった。そして Edward I の治世に至るとユダヤ人の歴史に空白時代が生まれる。

国王エドワード一世は国家の機能が複雑化して，従来の課税法ではとても間に合わないのをみるや，次々と新しい税制を作っていった。その中に，16,000 人のユダヤ人に対する壊滅的な‘poll-tax’（人頭税）があった。また，この国

王の母は極端な反ユダヤ主義者で，城下のユダヤ人商人のライバルであるクリスティアン商人の間に反ユダヤ熱をあおり，彼女の町 Cambridge から，すべてのユダヤ人を追放してしまった。

また，ユダヤ人迫害に拍車をかけたものに，Dominican（ドミニコ会士）の一人 Robert de Ridingge のユダヤ教改宗事件がある。これはユダヤ人を改宗させることに特に熱心であった同派の聖職者の異常な憤りを招いた。そして，この直後，大量の偽貨幣が出まわると，多数の婦人，子供を含むユダヤ人が投獄され，そのうち 263 人が処刑され，他は莫大な身代金を支払わされて釈放された。

同じ頃 Northampton のユダヤ人がキリスト教徒の子供を殺したというデマがとぶと，また多くのユダヤ人が馬で身体を裂かれたり，絞り首にされたりした。

この事件からすこし後，ユダヤ人によってキリスト教会の神聖が冒瀆されたという噂が流れると，またしても多くのユダヤ人が投獄された。しかし今度は身代金を払って釈放というわけにはいかなかった。というのはドミニコ派と Franciscan（フランシスコ派）の修道士達が強硬に反対したためである。この二派は説教の雄弁によって，ユダヤ人と改宗させることを競うのを表看板に掲げていたが，実際には改宗を拒否するユダヤ人の言葉尻をとって，「教会冒瀆」だとか「牧師の神聖を汚した」などの理由で彼等を放逐することが目的であった。

国王は大事な財源を失いたくはなかったが，この二派がローマ教皇に直訴状を出したため，国王も考えを改めざるを得なくなり，莫大な保釈金をとり，彼等の手元にもうこれ以上取り上げるいかなる財産がないことを見極めた上で，ユダヤ人追放にふみきった。かくて 1902 年，イギリス全土のユダヤ人は，王妃の好意で[35]，わずかに残った動産を水夫達の略奪から保証されて，多年住み慣れた第二の祖国を後にした。

この悲劇は，たまたま十字軍のたび重なる失敗で国民の憎しみが改めて，報復しやすく無抵抗な異教徒に向けられたのと，教会の実績争いがつくりだしたものである。それ以後イギリスにユダヤ人が居住を許されるのは，Oliver Cromwell 治下になってからである。しかし，彼等の退去後，イギリスに金利業者がいなくなったかというと，そうではない。ユダヤ人の次にイギリスで金貸業を営んだのはカオル人——南仏カオル市生まれのキリスト教徒で，彼等は教会の掟を巧みに解釈する天才的な方法を発見した。彼等は非常に短い期間に限り，無償で金を貸し，期限が切れて，貸金が返済されない場合には，返済期

日以後の期間に対して賠償を要求した。これが‘interest’(利子）と呼ばれるもので，ラテン語の‘id quod interest’（間にあるもの）からきている。その後は，イタリー人達が銀行業を営み Lombardy[36]生まれの両替商は，その名をロンドンの Lombard Street[37] に残すこととなった。しかし，シェイクスピアの時代になると，銀行業はイギリス人の手によって行われていた。

そして，このユダヤ人不在の三世紀半の間に，ユダヤ人に関するあらゆる誇張された神話が出来上っていった。*The Wondering Jew*，あるいは *Little Hugh of Lincoln*[38] あるいは，*The Jew's Daughter*[39]というような極端に悪魔化されたユダヤ人観がイギリス人の間に侵透していった。シェイクスピアの時代にもこの観念は残っている。*Gernutus* あるいは *Three Ladies of London* に見られれる凶悪なユダヤ人は当時の民衆の間でのユダヤ人観を知る手がかりとなる。Christopher Marlowe (1564—93) の傑作，*The Jew of Malta* が大評判を得たことは注目に値する。周知の如く，マーローのユダヤ人は文字どうりの悪魔で，娘に毒を飲ませ，その恋人を殺し，最後は味方を暗殺しようとして，裏切られ，大釜で煮殺されるというグロテスクなものだが，このような作品が評判をえたということも当時のユダヤ人観をよく示している。

しかも，このような雰囲気の中にあって，たまたま国禁のユダヤ人を主人公とする社会的大事件が持上った。Roderigo Lopez というポルトガル系ユダヤ人の医者がいた。彼はイギリスにポルトガル人[40]として亡命し，ロンドンで開業し，成功を納めていた。彼はその優秀な医術を認められて，女王の侍医という医師として最高の名誉を得た。同じ頃，スペイン王 Philip II (1527—98) によって，王位継承を阻まれた Don Antonio という王族が，ロンドンに亡命していた。ロペスは最初アントーニオの通訳をしていたのであるがそのうちに感情の齟齬を来たすようになった。この事情を知ったスペインの密使が，ロペスを金で買収して，アントーニオ暗殺の陰謀に参加させようとした。

当時のイギリスは，スペインとは不倶戴天の仇敵関係にあり，ことごとくスペインと対立していて，その急先鋒が若き熱血漢 Earl of Essex[41] であった。エセックス伯は四年前，アントーニオを王位につけるべく，彼と共にポルトガルに遠征したが失敗し，また，その後のフランス出征もこと志と違い，名誉挽回を焦っていた。当時の宮廷では，エセックス伯を中心とする急進派と Earl of Salisbury[42] の率いる穏健派とが主導権を競っていた。エセックス伯はソーリズベリ伯一派に対抗して新たに自分の諜報機関を設立して，反スペイン熱を盛んに煽っていた。たまたま，この諜報機関がロペス宛の疑わしい手紙を持っ

た Luis Tinoko なる者を逮捕し，調査の結果，ティノコと Estava Ferrera di Gama という二人の人物が共謀して，アントーニオを毒殺する計画があり，ロペスもそれに一枚加わっていることを，ティノコが拷問の末白状した。好機逸すべからずと，エセックス伯は，それを証拠にロペスを告発したが，かえって女王に叱責を受けることになり，ライバルのソーリズベリ伯の面前で恥辱を招いた彼は三日間自室に閉じこもり出て来なかったという。この若き血に燃ゆる急進派の指導者は自己の名誉挽回と高慢なライバルの鼻をあかすために，何としても，この事件の有罪を実証せねばならなかった。

スペイン——アントーニオの毒殺——陛下の侍医…… これらを結びつけて考えてみると，フィリップ二世が女王の暗殺を企てたと想像するのは至極簡単である。拷問にかけられると，ティノコとフェレラ・ディ・ガーマはすぐにエセックス伯の思うとうりに白状し，一方ロペスも長い拷問の末，半ば失神状態で，女王毒殺の計画を認めた。三人はエセックス伯自身が宰領する裁判で死刑を宣告されたものの，女王はなかなか勅許を下そうとしなかった。女王もポーシアの言うように拷問を信用しなかったのである。

Por. Ay, but I fear you speak upon the rack,
Where men enforced do speak anything. (III. ii. 32—3)

それから，四ケ月後の 1594 年六月，ユダヤ人暗殺者を憎み，女王の安泰を願う国民の声に押されて，女王は遂に死刑執行に署名した。かくて，エセックス伯は思いのままに，反スペイン熱を国民の間に盛り上げ，自らは女王の生命をスペインの魔手とユダヤ人の悪魔から救った英雄となった。

当日の Tyburn 刑場にあふれた数万の弥次馬を前にして，ロペスは最後の声をふりしぼり——'I love the Queen even more than Jesus Christ.'—— と叫んだが，その必死の声も，群集の——'He is a Jew, he is a Jew'—— という罵声にかき消されてしまった。

シャイロックの有名な台詞——'He hath disgraced me, losses, mocked at my gains, scorned my nation, thwarted my bargains, cooled my friends, heated mine enemies ; and what's his reason ? *I am a Jew*—— も Stoll[43] にいわせれば，ロペスの最後の訴え 'He is a Jew' と叫んだ当時のイギリス人には，ユダヤ人のたわ言としか聞えなかっただろう，となってしまう。。

老人は首吊り柱の下に，せきたてられ絞首され，次には，当時の人々の趣向に合ったゲームが展開された。柱からおろし，仮死状態で去勢，内臓抉出，そして八ツ裂……。フェレラ・ディ・ガーマ，ティノコも同じ運命であった。し

かし，最後のティノコはこのゲームに意外な興趣を添えた。すなわち，彼はあまりに早く柱からおろされたために息を吹返して絞首人にとびかかり，馬乗になってポカポカなぐり始めたのだ。刑場を取巻いた数万の見物人はこの思わぬ出来事に大喜びであった。彼等にはこれも「熊いじめ」と同じ楽しみの一つであった。だが，ティノコは改めて絞首され直し，弥次馬連は満足して帰っていったという。

グラシアノがシャイロックに向っての悪態：——

Thou almost makest me waver in my faith
To hold opinion with Pythagoras,
That souls of animals infuse themselves
Into the trunks of men : thy currish spirit
Govern'd a wolf, who, hang'd for human slaughter,
Even from the gallows did his fell soul fleet,
And, whilst thou lay'st in thy unhallow'd dam,
Infused itself in thee ; for thy desires
Are wolvish, bloody, starved, and ravenous.(44)

——は，まさしくロペスを皮肉ったものであろう。ラテン語の Lupus は狼の意で，これは Lopez にあてつけた 'Pun'（地口）であるというのが大方の一致した意見である。「絞首台から逃げだした云々」はもちろん Pythagoras の霊魂輪廻説に基ずくものであるが，実際には絞首台から逃げだしたティノコにあてつけたものだろう。

この事件の後イングランドでは，ロペスは外人叛逆者の典型となり，その不埒は流行歌になって町々に伝わった(45)。ロペスがたまたまユダヤ人であったという一つの異常事により，スペインの陰謀に対するイギリス国民の憎悪に一層暗い陰影を添え，反ユダヤ感情が非常に高まった。そしてマローの *The Jew of Malta* がしばらくぶりに 'Lord Admiral's Company' によって上演され，非常な大入り満員を示した(46)。

それから二ケ月程後の八月に Newington Butts Theatre で *Venesyon Comedey*（ヴェニスの喜劇）という劇が上演された。これこそ *The Merchant of Venice* であると Malone(47) がのべている。これはシェイクスピアの属していた 'Lord Chamberlain's Company' によってではなく 'Lord Admiral's Company' によって演じられているが，1594 年 6 月から 1596 年まではこの二つの劇団が Newington Butts Theatre で共演していたので注目に値する説である。この説

の真偽はともかく，このロペス事件の後 *The Jew of Malta* のような，ユダヤ人を悪魔視した劇が上演されたりしたことは当時の国民感情がいかなるものかを如実に示すものである。

さて既述のごとく中世的観念がまだ生きている民間人に伍して，シェイクスピアが反金利感情と合わせて，一つの社会的大問題である反ユダヤ感情をとりあげた意味は充分に考えられる。彼は天才的な劇詩人ではあるが，一方，その日，その日の入場者によって生活を支えている座付の職業作家でもあった事実を我々は銘記せねばならない。それと同時に，文学作品はあくまで「文学」であって，決して歴史や，風俗や，単なる社会的事件の反映ではないということも忘れてはならない。（未完）

（注）

（1） Thomas Carlyle (1795—1881) : "*On Heroes, Hero Worship and the Heroic in History*", Lecture III, '*Hero as Poet*'

（2） by Andrew Cecil Bradley (1851—1935)

（3） 歴史的批評あるいは，その複合的方法をも含む広い意味での写実主義批評論。

（4） William Wordsworth (1770—1850) "*On the Extinction of the Venetian Republic*"

（5） George Gordon, Lord Byron (1788—1824) "*Childe Harold's Pilgrimage*"

（6）「われわれは 4,500 頭の馬と 9,000 名の従卒を運ぶためのコイシェ船と，4,500 名の騎士と 20,000 名の歩兵とを運ぶための船とを提供いたします。さらにわれわれはこれらすべての馬と人員のための9か月間の食料と飼料とを提供することを約束します。……その条件といたしまして馬一頭当たり4マーク，人員1人当たり2マークの支払いを申し受けます。われわれは，神の愛のために右のほか 50 隻の武装したガレー船を提供します。ただしその条件として……海路と陸路とによってわれわれの獲得するすべての土地もしくは貨幣のうち，われわれは半分をとり，貴方方は残りの半分をおとり下さい。」吉岡力著「世界史の研究」p. 170 より

（7） Lepanto 沖の海戦（1571）。ヴェニス，スペイン軍オスマン・トルコを破る。

（8） カルヴィン支配下のジュネーブにおいてさえ 1545 年には 34 人の魔女が殺され，ドイツのハンブルグの司教は 600 人を火刑に処した。1500—1700 年の間にドイツで殺された魔女は1万人とも 10 万人ともいわれている。

（9） 1597 年 *Doemonologie, in forme of a Dialogue* を出して魔法の実在を論じている。

（10） 中島関爾著「シェイクスピア論考」世界書院，p. 204

（11） 当時の人々は，この four elements，あるいは天体にしても，すべて階位があり，

その階位により並んでいると考えた。尚，原素について詳細は，「アリストテレス全集．4．天体論」村治能就訳，岩波書店，p. 113—148 参照。

(12) 古代人が空中に存在すると想定した精気であり，天界を取巻く純粋な空気のこと。通例，月より上はエーテルで，下は汚れた空気である。この点についての詳しい資料は「アリストテレス全集．4．天体論」村治能就訳，岩波書店，p. 9—12 参照。

(13) Cf. E. M. W. Tillyard : *The Elizabethan World Picture.* (Chatto & Windus. 1967) p. 57.

(14) *The Merchant of Venice.* I. ii. 39—41.

(15) *Shakespeare's England. An Account of the Life and Manners of his age.* Clarendon Press. Oxford. Vol. II. p. 411.

(16) Hippokrates (B. C. 460—375) が主張し，Klaudios Galenos により体系づけられた学説で，中世医学の根本となっていた。

(17) *Julius Cæsar* V. v. 73—75.

(18) この星は占星学者が「冷たく乾性，憂鬱症，男性的で，悪意あり，生命の破壊者なり」といった星である。尚以上は小津次郎，武井ナヲエ訳「シェイクスピアとエリザベス朝演劇」白水社，p. 42. によるところが大きい。

(19) Shakespeare の *The Merchant of Venice* は気質喜劇ではないので，これをそのままあてはめるわけにはいかない。しかし，Shakespeare の登場人物では豊かな人間性に溶け込んでいるだけで，この型が見られる，という学者もいる。Cf. 和田勇一著「ベンジョンソン」p. 31.

(20) *Twelfth Night.* III. ii. 69.

(21) *The Second Part of King Henry* IV. IV. iii. 113.

(22) *The Merchant of Venice* I. i. 80—83.

(23) 1502 年には Coperunicus が 'Copernican Theory' を発表したが，一般にはトレミイの天動説がまだ信じられていた。Galileo Galilei がこの説を支持して宗教裁判にかけられたのはずっと後の 1633 年のことであるから，一般の天文学に対する考え方は想像に難くない。

(24) 中世においては，この九種の天使に対応して，九種の悪魔の階位もあると考えられていたがシェイクスピアの頃は一般的ではなかった。

(25) E. M. W. Tillyard : *The Elizabethan World Picture.* (Chatto & Windus 1967.) p. 38.

(26) ティリーヤードによると Cherubim が歌うというのは従来プラトーンの説で説明されたが，これは Dionysius の説であるという。ディオニシウスは恒星を支配するものこそ Cherubim であると考えたからシェイクスピアは古い考え方を知っていたのだろうといわれる。ibid. p. 39.

(27) プラトーンによれば，この音楽は，イヴがりんごを食べる前には聞えたのだという。アリストテレスはこれに反論したが，エリザベス朝ではプラトーン的な考え方が支配的であった。

(28) Cf. *Psalm.* 15—5. *Nehemias.* 5—7. *Jeremias.* 15—10. *Ezechiel.* 18—8. 18—13. 22—12. *Luke.* 6—34. etc.

(29) *Politics.* I. x. 4 : xi. 1.

(30) Cf. *Genesis.*

(31) シェイクスピアは原話の商人親子の金の貸借を，貴族のバサーニオが大商人に借りるようにしたのは当を得ている。当時のイギリスでは，金に困った貴族が大商人に借金をするのは珍しい事ではなかったからである。

(32) *Shakespeare's England. An Account of Life and Manners of his age.* Clarendon Press. Oxford. Vol. I. p. 332.

(33) やがてこれは十七世紀に至り市民革命とななってゆく。

(34) キリスト教社会では，神に誓った信用で取引が行われていたので異教徒はまともな職業につけない。

(35) 彼女は Hagin Doulackes というユダヤ人の侍医を抱えていた。

(36) 高利貸の別名を Lombard，あるいは Shylock，という。

(37) ロンドンの銀行街。

(38) Cursor Mundi の中にある民話。

(39) スコットランドの民話……悪魔の化身のユダヤ少女がクリスティアンの少年を殺す。

(40) ユダヤ人は当時国禁であったから，ロペスはポルトガル人として亡命していた。

(41) Robert Devereux (1567—1601)

(42) Robert Cecil (1563—1612)

(43) E. E. Stoll : *Shakespeare Studies.* p. 276.

(44) *The Merchant of Venice.* IV. i. 130—8.

(45) 片岡鉄兵訳，「エリザベスとエセックス」富士出版社，p. 119.

(46) 八木毅著「シェイクスピアの喜劇」東京研究社，p. 99.

(47) by H. H. Furness. *A New Variorum Edition of Shekespeare. The Merchant of Venice* (Dover) p. 278—279.